

本当におそるべき方

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書 マタイによる福音書10章26～33節

26:「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。

27:わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。

28:体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

29:二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがあれば、地に落ちることはない。

30:あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。

31:だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

32:「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。

33:しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

これまで篤牧師からも同じような話はされてきたと思いますが、カルトとは、一言で言えば「歪んだ支配構造」であり、カルト被害とは、「この歪んだ支配・被支配の関係の中で、人権が失われたり、搾取され続けること」です。「カルト」と呼ばれる集団には、「宗教」や「ボランティア」「商業」「政治」などの表の顔に隠された、上層部の人間の富の追求という目的があって、その隠された目的達成のために信者たちは搾取され、また人権もそこなわれてしまうということが起きています。

ならば、支配というものが完全に悪であるかということ、そうとも言えません。カルトが「歪んだ支配構造」であるならば、その逆の、「歪みのない支配構造」というものもあるからです。そして、「歪みのない支配構造」というものがあるならば、それは、慈愛の神と、その神に畏怖の念を持ち、絶対的な信頼を寄せている人々との関係がそれにあたるでしょう。

この「歪みのない支配—被支配の関係」を、天の神様と結んでおられたのが、イエス様です。イエス様は時々「父がいなければ、私は何もできない」とか、「私は父の言うとおりに語り、また、行動している」と仰っていますが、それは、イエス様が心から天の神様を愛し、信頼し、そして、偉大な・愛なる神に敬虔な恐れ・畏怖の念を抱いていたからです。天の神とイエス様との関係が、カルトグループの特徴である「歪んだ支配構造」とは違っていることは、天の神とイエス様がこの世界の人々にもたらしてくださったものを見れば明らかです。

「天の神様とイエス様の間にある歪みのない支配—被支配の関係」が私たちにもたらしてくださったものは、「人に対する恐れからの自由」そして「愛と平和」です。私たちは、父のご意思に完全に従って語り、行動されたイエス様を通して、「人に対する恐れ」から自由になることができるんだ、そこから愛や平和は作り出されるんだと知ることで、私たちが日常的に経験している人間関係にまつわる問題や苦しみに対する解決のヒントを得たり、最終的に恐れからの解放を経験することも可能となるのです。

今日のイエス様のみことばは、ずばり「人々を恐れなくてもよいのだ」というメッセージです。イエス様が「人々を恐れるな」とおっしゃったのは、この先、弟子たちが「イエスの弟子だ」という理由で、ユダヤ人社会、あるいはローマに属する大勢の人々から迫害を受けることがわかっていたからです。10章の16節から24節で、これから弟子たちがどんな迫害を受けるかが書かれています。弟子たちは裁判にかけられたり、人々の前で鞭打たれる。為政者の前に連れて行かれ、あれこれと問い詰められる。兄弟は兄弟を、父は子を死に私、子は親に反抗して親を死なせる。イエスを信じていると言って、すべての人に憎まれる。弟子であるあなたたちだけでなく、家族も悪く言われるだろう。それでも、あなたたちを迫害し、悪く言い、痛めつけ、殺す人々を恐れてはならない、と、イエス様は言っているのです。

こういう話を聞かされると、拷問にかけられたり、殺されるとわかっていたら、恐怖を感じてしまうのが人間じゃないかと、誰もが感じるのではないかと思います。私自身も、ヤコブやアンデレ、バルトロマイなど、イエス様の直弟子たちが、どんな目にあって殉教したかという話を聞くだけで、ぞっとしてしまいます。

それでもなお、イエス様が弟子たちに「人々を恐れるな」とおっしゃった、このお言葉には、イエス様の、そして天の父なる神様のどんな思いが込められているのでしょうか。このことについて、イエス様はこういう言い方もしておられます。「体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」(28節)「体は殺しても、命は殺すことのできない者ども」というのが、弟子たちを迫害する「人々」のことですが、人は、他の人の体は殺すことができても、命は殺すことができない、だから、人など恐れなくてもよい、むしろ本当に恐れるべきは、神さまなのだとはどういうことなのでしょう。

そもそも、人が人を「恐れる」とは、どういうことでしょうか。冒頭で、カルト的な集団の中では「歪んだ支配—被支配という人間関係の構図がある」という話をしましたが、「歪んだ」支配—被支配の関係では、しばしば「恐れ」というものが、その不健全な関係を保たせています。

支配される側・弱い者である信者たちは、支配する側・強い者であるの教祖や指導者たちへの「恐怖心」から、思考や言動をコントロールされます。自分がこうだと思ったりやったりしたときや、ノルマが達成できなかった時や、教義について間違ったとき、信者は、人前で、しかも時には汚い言葉でののしられたり、こういうダメな信者がいるから、この教団のビジョンが実現しないのだ、お前が我々の足を引っ張っているのだ、お前のような奴は地獄行きだ、と責められたりしますから、信者たちは、指導者たちを恐れて、顔色を伺い、指導者たちを怒らせないように、常にビクビクするようになります。そして、自分ではなく指導者にとっての利益や欲求を優先するようになります。そういう状態が長く続けば続くほど、信者は無力感や、自分には価値がないという思いを募らせてゆき、同時に主体性をなくしてしまいます。

聖書の中で、「恐れる」という言葉が使われている箇所を読んでみても、このことは明らかです。例えば、イエスを憎んでいる律法学者たちが、イエスを捉えて殺してしまいたいけれど、イエスを支持している群衆を恐れて手出しができなかった、ということが書かれています。「人々を恐れた」律法学者たちは、「自分の意志とは逆」の態度を取って、結果的にイエスを自由にしてしまっている自分のふがいなさや、敗北感のようなものを心の中に募らせてゆき、それゆえにイエスに対する憎しみを増長させていったのだと思います。

あるいは、ユダヤの領主ヘロデ・アンティパスは、洗礼者ヨハネを預言者と認めて支持していた人々を恐れて、自分と妻について公然と批判したヨハネを殺すことができずにいました。彼は、ユダヤの領主という、ユダヤ人の中では最高の地位についていた人物でしたが、自分が民衆から非難されることを恐れた結果、自分の握っている権力を行使することができずにいたのです。つまり彼の行動は、民衆を恐れる心によって、おそらく無意識にコントロールされていたわけです。ヘロデの場合は、実は洗礼者ヨハネにリスペクトしていた面もありましたから、より複雑な仕方で、彼は自分自身を不自由にしていました。

同じようなことが、総督ポンテオ・ピラトにも言えます。ピラトは、ローマ帝国からユダヤ人の住む土地の政治や司法を任されており、領主ヘロデよりもさらに力を持った人間でしたが、彼は、ユダヤ人から怒りや憎しみ

を受けることを恐れて、自分の見解・あるいは良心に従って、イエスは無罪であると宣告することをせず、最終的に自分が持っている権力と、それに伴う責任を放棄しました。ピラトは、ユダヤ人への恐れゆえに、総督としての自分の主体性をなくし、イエスをユダヤ人の手にゆだねてしまったのです。

数年前からよく使われるようになった「忖度」とか、「遠慮」とか、場合によっては「配慮」ということも、実際には人が人を恐れるところから起きている場合が多いのではないかと思います。

わたし自身も、人を恐れて行動した結果、無力感、自己無価値観を抱き、主体性をなくした経験がありますから、人を恐れるということの苦々しさや、それが自分自身にもたらす悪影響はよくわかっているはずなのですが、それでも人との関係の中で、時に相手への恐れから、自分の意志や良心とは真逆なことを言ったりやったりしてしまう時もあります。そういう時には、本当に心にぽっかりと穴が開いたようなむなしさや、自分が自分ではない、いやな感じが強く残りますし、相手に対する好意的な感情が薄れて、怒りとかいら立ちがふつふつと沸いてきます。

このような「人に対する恐れ」と「不健全な支配-被支配」の関係に関わる内容について、「自由とはなにか」という観点から、塩谷直也先生という、教団の教師であり青山学院大学の教授で宗教部長をされている方が本に書いておられますので、少し長いですが紹介します。

「その存在を否定することも、その存在から逃げることも可能。無視したって見捨てたってかまわない。その人から拘束・支配されない。そういう相手こそ私たちは愛することができます。

……ある夫婦のエピソードです。

夫はあるスポーツが好きでした。しかし妻はそのスポーツが大嫌い。二人はよく衝突しました。それは決まって夫がそのスポーツ観戦に妻を誘う時でした。

『行こう!絶対楽しいから。』しつこくおっとは誘います。クリスチャンの妻は、そのスポーツに全く興味がなかったのですが、心の中で考えます。『神様は、私に愛情深い妻であることを願っておられる。それに夫を怒らせるのは嫌だし……。』しぶしぶ夫について生きますが、本当は行きたくない。その気持ちがどうしても態度で現れます。

- ・ぐずぐずして出発を遅らせる。～『時計忘れた。ちょっとトイレ』など。
- ・試合中、全く興味を示さない。～うつむいて携帯ばかりいじってる……。
- ・出かけている間、ずっと不機嫌でいる。～『寒いわね、のどかわいた』
- ・夫に対して心を閉ざす。～食事中も無言。
- ・その後何日も、いかに退屈だったか夫にこぼす。～ぶつぶつ言い続ける。

しまいには夫も嫌気がさし妻に言いました。「来てもそんなつまらなそうにするなら、もう来なくていいよ!」せっかく犠牲を払ったのに、感謝すらないことに妻は深く傷つくこととなります。

夫が妻の気持ちも考えず、スポーツ観戦にしつこく誘うのは問題です。しかももうひとつの問題があります。妻が『嫌です』と言えないことです。彼女は『NO!』という選択肢を持っていません。その結果、一日中イライラしています。妻は、夫の誘いを断る……自由がないのです。

私たちが心からの『はい』を言うためには、まず『いいえ』と言える自由が必要です。誰かを心から愛するためには、その人を『愛さない』という選択肢を持つことが前提となります。妻は『夫の誘いに応じなければならぬ』と思い込んでいました。恐れがあったからです。『冷たい人』と思われることを恐れていました。また、夫から愛されなくなることも恐れていたのです。だから本心は嫌だけれども、選択の余地なく、いやいやスポーツの観戦に行っていました。

私たちは確かに、愛する人からの誘いに『はい』と素直に言いたい。しかし、本当の『はい』を言うためには、『いいえ』と言える自由が必要。ただそのためには『いいえ』と言っても相手からの評価は変わらないし、見捨てられることもない、との信頼が必要となります。

神様と人間との関係にも、同じことが言えます。神様に招かれた時、心から『はい、従います』と答えたい。しかし心からそう答えるには『嫌です、従いません』と言える自由が必要です。そしてその前提として、神様を拒んでも神様の私に対する愛は変わらない、との深い信仰、信頼が私たちに求められています。)(『視点を変えて見てみれば——19歳からのキリスト教』塩谷直也著、日本キリスト教団出版局、2019年)

イエス様は、「人ではなく、命も体もゲヘナ(つまり地獄のこと)で滅ぼすことのできる方(天の父なる神)を恐れなさい」とおっしゃいましたが、イエス様ご自身は、父なる神に対して「いいえ」と言える自由と、それでも自分に対する天の父の愛は変わらないという深い信頼と信仰に生きておられました。神からの刑罰や地獄に対する恐怖からではなく、ご自分をとことん愛してくださる天の父への健全な畏怖の念を持って、自分を偽らずに「はい」と言って従われました。そんなイエス様が「ゲヘナ」という言葉で神への服従を強要するはずがないのは明らかです。

私たちは、神様から髪の毛一本一本を覚えられているほどに、徹底的に愛されています。スズメは本当に可愛らしい小鳥ですが、それにもまして優れた、価値ある存在として私たちは神から変わらぬ愛を注がれています。私たちは、天の神と私たち人の仲を取り持ってくださいイエス・キリストへの信仰によって、たとえ「NO」と言ったとしてもなお、神様の御腕のなか、神様の心の中にあなたの居場所はちゃんとあると保証されています。それが32節のみことばです。このお言葉を信じて、偽りのない自分のままで神と人を愛する者になることを願って歩いて行きましょう。マタイ21章にある「二人の息子のたとえ」で、父親から「今日、ブドウ園へ行って働きなさい」と言われた兄は「いやです」と答えたけれど、後で考え直して出かけたのに対して、弟は「はい、お父さん」と答えたが出かけなかった、という話が出てきますが、この兄と弟、どちらが父を本当に敬い従う者だったかという点、「いいえ」と言えた、不健全な恐れのない兄でした。私たちがこの兄のようでありたいのです。

ハイと言ってもイイエと言っても、私たちは神様から変わらぬ愛を注がれている。このことが信じられない時、また、このような関係がそこなわれている人間関係の中で、私たちは、神や人から、不健全な「歪んだ支配」を受けて、恐怖ゆえに自由や愛や、いつわりのない一致と平和がわからなくなり、一人一人が持っている存在の輝きが消えそうになってしまうでしょう。「命」(プシュケー 魂・心・精神とも)とは人間存在そのものを指す言葉で、人に「命」を与えたり取り去ったりできるお方はただお一人だけです。私たちは、意識的にであれ無意識的にであれ、恐れという感情を利用して、一人一人の「命」を損ねる思想や言葉にあふれたこの世に生きて、うめき、自分を見失いそうになる時もありますが、人は人の「命」を殺すことはできません。もしも、それが奪われそうだと感じる時には、変わらず私たちに語り掛けられている神の愛のことばを心を澄まして聴き、聴いたことを明るみで語りたいたいです。アウトプットすることで神の愛の言葉はよりいっそう一人一人の「命」に、そして世界に、刻まれてゆくからです。

祈り

あなたの愛を疑わずに信頼して、恐れゆえに心を偽ることなく、これが主の道だと確信できる道を歩いてゆけますように。また、私たちの唯一の神であるあなたを畏れ、あなたの御前にあって謙虚であることができますように。アーメン。